編集者への手紙 *Letters to the Editor*

鍼治療に温灸を併用して坐骨神経痛の治療を行った40例**Treatment of Sciatica using Acupuncture and
Moxibustion: A Report of 40 Patients**

キーワード：坐骨神経痛、温灸、鍼治療

Key words : sciatica, indirect moxibustion, acupuncture

拝啓

筆者は、坐骨神経痛40例に対して鍼灸治療を施し奏功したので以下に報告させていただきます。ご批判よろしくお願い致します。

敬具

周 怡 ZHOU Yi

天津医科大学総医院針灸科
鞍山道154号
天津市300052
中華人民共和国

【はじめに】

坐骨神経痛は、中国医学では"痺症"の範疇に属する。筆者は2年近くにわたって、鍼治療に温灸を併用して40例に治療を行った結果、以下の如く奏功したので報告する。

【対 象】

対象は天津医科大学総医院針灸科外来を受診した坐骨神経痛患者40例で、男性27例、女性13例(22歳～71歳、平均51歳)である。罹病期間は3日から最も長い患者では7年、平均の9か月であった。

患者はいずれも典型的な坐骨神経痛で、坐骨神経の走行に沿って、腰部、殿部、大腿裏側、膝窩部、足背に放散する鋭い痛み、灼熱痛を呈していた。下肢挙上試験(SLR)は全例で陽性であった。中医学的な経路理論による分類では、痛みが腰部以下の経絡から足太陽膀胱経に沿って放散する足

太陽型(25例)、痛みが殿部以下の経絡から足少陽胆経に沿って放散する足少陽型(15例)に分けることができた。また、大部分の患者は冷えが強く、湿度の高い環境で居住し、風寒に当たった既往があった。

【治療方法】

取穴：大腸俞、関元俞、腰の3～5夾脊穴、環跳、委中、陽陵泉等の経穴を主として用い、足太陽型には殷門、昆仑穴、足少陽型には絶骨(懸鍾)、丘墟穴を補佐とした。

患者は腹臥位或いは側臥位で、大腸俞、関元俞から棘突起へ斜めに2寸刺入した。また、華佗夾脊穴を5分直刺、陽陵泉穴を2～3寸直刺、陽陵泉穴を1寸直刺し、委中穴は浅刺した。提挿補瀉法によって得気を得たが、その際に、環跳、委中、陽陵泉の3穴については鍼感が患肢の足部まで放散することを確認した。高齢で、長期罹患し、体力の落ちている患者については、提挿平補平瀉法を主に用い、他の穴で補佐する方法を用いた。20分間留針して、その間に適切に鍼感を保つように1回行鍼し得気を得た。その後、大腸俞、関元俞に温灸を10分間行った。10日間の治療を1クールとし、1クール終了後2日間休み、更に次の1クールを行った。

【評 価】

1～3クール治療後、自覚症状、他覚所見がすべて治まった場合には「治癒」、自覚症状、他覚所見がすべて治まったものの、激しい動作後には稀

に痛みが出現する場合は「著効」、自覚症状、他覚所見は好転し、普通に歩行はできるが、激しい動作時に痛みを訴える場合は「有効」、3クールの治療を終了後も、自覚症状、他覚所見とも好転しない場合は「無効」とした。

【結 果】

治癒26例、著効11例、有効3例、無効0例で、有効率は100%であった。治療回数は最少5回、最大30回、平均15回であった。

【症例呈示】

42歳、男性、労働者。2002年3月21日初診。3年前より慢性の腰痛症がある。寒いと痛みが激化することがある。1週間前に重い荷物を背負い、また身体が冷え込んだために再発し、右殿部、大腿裏側から下腿前外側が激しく痛んだ。夜間に特に強く、刺すような痛みが足先へ放散した。痛みにより歩行あるいは寝返りができなかった。SLRは右で20°であったが、腰椎X線撮影では異常所見を認めなかった。

中医学的所見では、舌質は淡、薄白苔、脈は弦沈であった。痛痺と考え、散寒除痺・通経活路を治法とした。

取穴は大腸俞、関元俞、腰の3～5夾脊穴、環跳、委中、陽陵泉とした。鍼治療を行った後、温灸を行った。1回の治療後、痛み、圧痛は明らかに軽減し、SLRは60°にまで改善した。2クール治療後には、痛み、圧痛がなくなり、SLRは90°に改善した。その後も治療効果を強化する目的で継続して3回治療を行った。1年後の追跡調査で再発はみられていない。

【考 察】

坐骨神経痛は原発性と続発性の2種類に分けることができる。中国医学では、原発性の坐骨神経痛の多くは寒気湿邪を感受することと関係があると考えられている。すなわち、正気が不足、自然免疫能が低下した状態では、寒気湿邪が身体の虚に乗じて侵入し、経脈、血気の運行が阻害されて発症する。

筆者は背部俞穴である大腸俞、関元俞および華佗夾脊穴を特に選択して使用した。坐骨神経は第4腰神経から第3仙骨神経の前枝からなるが、大腸俞、関元俞を深刺することによりそれらの神経を刺激することができ、華佗夾脊穴はちょうどそれらの神経根の位置にあることがその選穴理由である。また、大腸俞、関元俞は太陽膀胱経の経穴であり、この2穴を取穴することにより太陽の経脈、経筋の病気を治療することができる。

今回の治療では、上記以外に環跳、委中、陽陵泉穴を取穴した。環跳は足少陽胆経と太陽膀胱経の経絡流注の重なるところである（編集委員会註：環跳についてはわが国と取穴法が異なる）。また、陽陵泉は八会穴の1つであり、委中は太陽膀胱経の合穴である。この3穴は気血の運行を促し、関節運動を潤滑にさせる。また、さらに他穴で補佐することにより、経路、気血の運行を促すこともできる。筆者は、以上の鍼治療に加えて温灸を施しているが、それにより臓腑を調整し、正気・元陽を補い、寒気湿邪を除き、根本的な治療を果たせたのではないかと考えている。

〈本論文は著者の希望により編集委員会が原文（日本語）に校正を加えました。〉